



監修の序

21世紀は大腸の時代とも言われているが、大腸腫瘍（上皮性・非上皮性）、非腫瘍性局在病変、消化管ポリポース、炎症性腸疾患、感染性腸疾患、自己免疫疾患・全身疾患などに伴う小腸・大腸病変、血管炎・循環障害に起因する小腸・大腸病変、薬剤に起因する小腸・大腸病変など、下部消化管の内視鏡診療に携わる医師はすべての疾患をよく理解し、鑑別診断や質的診断を正しく行わなくてはならない。また、内視鏡診断に関する成書は数多く存在するが、内視鏡機器や内視鏡診断分類などの進歩はめざましく、常に最新の内視鏡画像や内視鏡診断分類を学習する必要がある。

今回まさにタイムリーに、「美しい画像で見る内視鏡アトラス 下部消化管」というアトラスを私が監修し、江崎幹宏先生（佐賀大学）と岡志郎先生（広島大学）に編集作業を担当していただいた。その内容は、定義、特徴的な所見、鑑別のピットフォールを解説し、小腸・大腸の腫瘍から感染性・炎症性疾患まで、典型例とピットフォール画像で鑑別が学習できるものとなっている。本書をくり返し熟読していただければ、必ず明日からの診療にお役に立つものと確信している。本書が下部消化管の内視鏡診療に日夜研鑽を積まれている若い先生のお役に立てれば望外の喜びである。

最後に、編集作業を担当くださった江崎幹宏先生と岡志郎先生、そして、大変お忙しいなか快く執筆をお引き受けくださった諸先生に厚く御礼申し上げますとともに、このような機会を与えてくださった羊土社の諸氏に感謝するしだいである。

2024年初秋

JA尾道総合病院 病院長／広島大学 名誉教授
田中信治



編集の序

21世紀に入り内視鏡機器の進歩はますます活発となっている。内視鏡画像解像度の向上、画像強調内視鏡の進歩に加えて、バルーン内視鏡やカプセル内視鏡といった小腸内視鏡機器の開発により、従来は評価困難であった小腸病変の内視鏡診断も要求される時代となった。非腫瘍性疾患には感染、自己免疫、遺伝子異常、血管炎等による循環障害、薬剤などさまざまな要因により形成された腸管病変が含まれる。これらの疾患では、内視鏡所見に加えて臨床所見や他検査所見などから総合的に判断しなければならない疾患が少なくないが、一方で、各疾患の内視鏡所見に精通していなければ正しい診断を想起できないものも多い。

本書では第6～10章に掲載されている非腫瘍性疾患の編集を担当させていただいた。非常に多岐にわたる非腫瘍性疾患について、疾患の概要、特徴的な内視鏡所見、鑑別のピットフォールが美しい内視鏡画像とともにコンパクトに纏められており、非腫瘍性疾患の内視鏡診断のポイントを手早く、かつ正確に学ぶことができる書籍となったものと確信している。

最後に、本書の監修をご担当いただくとともに編集作業の機会を与えていただいた田中信治先生、ともに編集作業を行った腫瘍性疾患担当の岡志郎先生、そしてご多忙なか本書の趣旨を理解しご執筆いただいた諸先生方に厚く御礼を申し上げますとともに、本書作成に全面的なサポートをいただいた羊土社の方々に感謝の意を表したい。

2024年初秋

佐賀大学医学部内科学講座 消化器内科 教授
江崎幹宏



編集の序

近年のめざましい内視鏡診断機器の開発・改良に伴い、通常観察、拡大観察、画像強調観察などの内視鏡診断学は飛躍的に発展・進歩してきた。現在、これまでのさまざまな知見によって得られてきた小腸・大腸病変に対する内視鏡診断学は確立されつつあるが、鑑別診断を含めた精度の高い診断学は適切な治療方針を決定するうえで不可欠である。特に今回私が編集を担当させていただいた腫瘍性疾患に関して、正確な診断でない場合には、内視鏡切除/外科手術の選択、内視鏡切除法の選択などに直結し、患者様の不利益に繋がりがねない。

本書の最大の特徴は、下部消化管領域における最先端の著者による内視鏡画像を用いた下部消化管疾患診断の指南書といえる構成である。全編にわたり内視鏡診断上のポイントやコツが最高の画像とともに詳細に解説されており、初学者のみならずエキスパート、メディカルスタッフの方々にも有益な内容であることは疑いがない。ぜひこの一冊をくり返し手にとっていただき、明日への診療に生かしていただきたい。皆様の日常診療におけるバイブルとしての一冊となれば嬉しい限りである。

最後に、編集の機会を与您いただきました監修の田中信治先生、共同編集者の江崎幹宏先生、大変お忙しいなかにもかかわらず快く執筆をお引き受けいただきました先生方、このような貴重な機会をいただきました羊土社の関係者の方々にこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

2024年初秋

広島大学大学院医系科学研究科 消化器内科学 教授
岡 志郎